

ロシア語の相互代名詞 друг друг-*

山田久就

1. 始めに

本稿では、ロシア語の相互代名詞 друг друг-の統語的側面を考察の対象とする¹。相互代名詞 друг друг-とその先行詞は、どのような環境にでも現れることができるわけではない²。例えば、(1)aは、先行詞が造格のアクタントで、相互代名詞が前置詞 о を伴った対格のアクタントである³。それとは反対に、(1)bは、先行詞が前置詞 о を伴った対格のアクタントで、相互代名詞が造格のアクタントである。(1)aは適格な文であるが、(1)bは不適格な文である⁴。

- (1) a. Виктор ударил *двумя камнями друг о друга*.
 b. *Виктор ударил *о два камня друг другом*.

また、(2)aは、先行詞が前置詞 у を伴った生格のアクタントで、相互代名詞が前置詞 о を伴った前置格のアクタントである。それとは反対に、(2)bは、先行詞が前置詞 о を伴った前置格のアクタントで、相互代名詞が前置詞 у を

*本稿は日本ロシア文学会 1998 年度大会で発表した内容に加筆と修正を施したものである。三谷恵子先生に草稿に対して貴重なご助言をいただいた。ここにお礼を申し上げたい。本研究は、この 10 年に出版された本、新聞、雑誌から集めた相互代名詞 друг друг-が用いられている 831 の例をもとに、ロシア語母語話者にインフォーマント調査を行った結果に基づいている。Марина Ю. Жукова 氏、Федор А. Акимов 氏、Ирина М. Вознесенская 氏を中心に多くの人にロシア語のインフォーマントになっていただいた。ここに感謝の意を申し上げたい。

¹本稿では、ロシア語の друг друг-を相互代名詞と呼ぶが、これは便宜的な呼び名である。本稿では、друг друг-が代名詞であるかどうか、また、代名詞の定義そのものは問題にしない。

²先行詞 (antecedent, антецедент) とは、代名詞が指示対象に関して依存している名詞である。ロシア語の文献では、Падучева (1974), Аругтюнова (1976) などが антецедент という用語を用いている。

³本稿では、相互代名詞を太字体で表わし、先行詞を斜字体で表わす。

⁴*は、文あるいは語結合が不適格であることを意味する。

伴った生格のアクタントである。(2)aは適格な文であるが、(2)bは不適格な文である。

- (2) a. Таня спросила *у них друг о друге*.
 b. *Таня спросила *о них друг у друга*.

下の(3)では、相互代名詞とその先行詞が名詞を中心要素とする語結合の中に現われている。(3)aは、先行詞が生格のアクタントで、相互代名詞が造格のアクタントである。それとは反対に、(3)bは、先行詞が造格のアクタントで、相互代名詞が生格のアクタントである。(3)aは適格な語結合であるが、(3)bは不適格な語結合である。

- (3) a. восхищение *Ивана и Тани друг другом*
 b. *восхищение *Иваном и Таней друг друга*

次の(4)でも、相互代名詞とその先行詞が名詞を中心要素とする語結合の中に現われている。(4)aは、先行詞が造格のアクタントで、相互代名詞が生格のアクタントである。それとは反対に、(4)bは、先行詞が生格のアクタントで、相互代名詞が造格のアクタントである。(4)aは適格な語結合であるが、(4)bは不適格な語結合である。

- (4) a. обвинение *двумя известными учеными друг друга*
 b. *обвинение *двух известных ученых друг другом*

このように、相互代名詞*друг друг-*とその先行詞を含む文および語結合は、相互代名詞とその先行詞の環境によって、適格になったり、不適格になったりする。

本稿には次の二つの目的がある。第一の目的は、相互代名詞*друг друг-*とその先行詞の分布を記述することである。筆者の知る限り、相互代名詞*друг друг-*とその先行詞の分布を十分に記述している研究はない。第二の目的は、相互代名詞とその先行詞の分布を理論的に分析することである。形態統語的な範疇「形式的区分」と意味統語的な範疇「意味的区分」が相互代名詞とその先行詞の分布に強く関わっていると思われる。そこで、本稿では、「形式的区分」と「意味的区分」という二つの概念を基準にして相互代名詞とその先行詞の分布を整理し、相互代名詞とその先行詞を含む文および語結合が適格であるために満たしていなければならない条件を定めることを試みる。

本稿の構成は次の通りである。2節では、本稿の理論的前提となる文法モデルについて説明する。統語部門に形態統語構造と意味統語構造があり、形態統語構造には「形式的区分」に基づいて、意味統語構造には「意味的区分」に基づいて、それぞれ、アクタントの間にランキングがあることを仮定する。3節では、アクタントの形態統語構造と意味統語構造でのランキングを基準に相互代名詞とその先行詞が現れる環境を整理しながら、相互代名詞とその先行詞の分布を記述的に明らかにすることを目指す。4節では、アクタントの形態統語構造と意味統語構造でのランキングからアクタントの総合的なランキングを導き、相互代名詞とその先行詞を含む文および語結合が、適格であるために、満たしていなければならない条件を定めるを試みる。

2. 形態統語構造と意味統語構造：理論的前提

本節では、相互代名詞 *друг друг-* とその先行詞の分布を理論的に分析する上で必要であると考えられ、そして、理論言語学で一般に妥当なものと考えられている理論的前提を提示する⁵。

文法の統語部門に形態統語構造と意味統語構造がある。形態統語構造とは統語部門における形態部門との接点であり、意味統語構造とは統語部門における意味部門との接点である。

文の内部構造は、語結合の連続である。語結合は、中心となる成分とそれに従属する成分からなる。語結合の中心となる成分を主要部 (head, *хозяйин*) と呼び、主要部に従属する成分をアクタント (*actant*, *актант*) と呼ぶことにする。本稿では、(5) のような文も動詞を主要部とする語結合と考える⁶。

(5) Иван дал Тане книгу:

語結合には、上の (5) のような動詞を主要部とする語結合、下の (6) のよう

⁵ 本節で展開する文法モデルは、変形を用いないタイプの生成文法、LFG (Lexical Functional Grammar) や HPSG (Head-Driven Phrase Structure Grammar) などの基本的な考え方を採用している。LFG については Bresnan (ed.) (1982)、HPSG については Pollard and Sag (1994) を参照していただきたい。

⁶ 主格名詞も対格名詞、与格名詞と同様に語結合の一部をなして、語結合のアクタントであるとする。昔の言語学者、ロシア語学者は、対格名詞や与格名詞が動詞に従属しているのに対して、動詞が主格名詞に従属していると考えたり、主格名詞と動詞はどちらもどちらにも従属していないと考えていたが、現代の言語学者、ロシア語学者の多くは、主格名詞が動詞に従属していると考えていると思われる。例えば、Русская Грамматика (1980)。

な名詞を主要部とする語結合、そして、例は示さないが、形容詞を主要部とする語結合、副詞を主要部とする語結合がある。

(6) *помощь Ивана Танее*

形態統語構造で、語結合の各アクタントは、形態標示 (morphological marking, морфологическая маркировка) と形式的区分 (формальное членение) という二つの属性 (атрибут) で分類される。形態標示という属性は、語結合の各アクタントが形式的にどのように具現されているかを表したものである。形態標示という属性の値は、主格、対格、与格、造格、生格、そして、いろいろな前置詞と対格、与格、造格、生格、前置格の組からなる。形式的区分という属性は、二段階に設定される。まず、語結合のアクタントは、語結合の主要成分と二次的成分に分類される。動詞を主要部とする語結合では主格名詞と対格名詞が語結合の主要成分であり、それ以外のアクタントが二次的成分である⁷。ただし、持続時間を表すために用いられる副詞的な対格名詞などは二次的成分である。また、名詞を主要部とする語結合では、生格名詞が主要成分で、それ以外のアクタントが二次的成分である。このようにアクタントを分類するのは、自動詞と主格名詞の結び付いた語結合と他動詞と主格名詞、対格名詞の結び付いた語結合を動詞を主要部とする語結合の典型、そして、名詞と生格名詞の結び付いた語結合を名詞を主要部とする語結合の典型と考えるからである。さらに、動詞を主要部とする語結合の主要成分は、主要成分 1 と主要成分 2 に分類される。主要成分 1 が主格のアクタントであり、主要成分 2 が対格のアクタントである。

上の (5) の三つのアクタントは、形態統語構造で下の (7) に示す属性を持っている。

(7)

	Иван	книгу	Танее
形態標示	主格	対格	与格
形式的区分	主要成分 1	主要成分 2	二次的成分

形態統語構造には次のようなアクタントのランキングがある。

(8) a. 主要成分 > 二次的成分 b. 主要成分 1 > 主要成分 2

⁷ 否定文で主格や対格と交代する否定の生格も語結合の主要成分と考える。

意味統語構造で、語結合の各アクタントは、意味役割 (semantic role, семантическая роль) と意味的区分 (семантическое членение) という二つの属性で分類される。意味役割とは、動詞など主要部によって表される状況に対してアクタントの指示対象が持っている役割を抽象化し、いくつかに分類したものである⁸。どのような意味役割を仮定するべきであるのかはいろいろと異なった説がある。一般に、主要な意味役割として、動作主 (agent, агент)、被動者 (patient, пациент)、対象 (theme, объект)、受け手 (recipient, получатель)、経験者 (experiencer, экпериденцер)、道具 (instrument, инструмент)、着点 (goal, конечная точка)、起点 (source, начальная точка)、場所 (location, место) などが仮定されている。意味役割は優位性において階層をなしていると一般に考えられている。本稿では、Bresnan and Kanerva (1989) に基本的に従った形で次の (9) の意味役割の階層を仮定する。

- (9) 動作主 > 経験者、受け手、渡し手 > 道具 > 被動者、対象 > 位置、着点、起点 > 情報内容

意味的区分という属性は、意味役割の階層の高い順に、一つの語結合に含まれるアクタントを意味要素 (семантический состав) 1、意味要素 2、意味要素 3、意味要素 4 ... と分類したものである。意味要素 1 は、論理主語とよく呼ばれていて、本稿で論理主語という用語を用いる場合は、意味要素 1 と同義である。先に示した (5) の三つのアクタントは、意味統語構造で、次の (10) に示す属性を持っている。

(10)

	Иван	Тане	книгу
意味役割	動作主	受け手	対象
意味的区分	意味要素 1	意味要素 2	意味要素 3

意味統語構造には、次のようなアクタントのランキングがある。

- (11) 意味要素 1 (論理主語) > 意味要素 2 > 意味要素 3 > 意味要素 4 > ...

⁸ 意味役割やそれに類する概念について詳しくは、Fillmore (1968), Jackendoff (1972, 1990), Мельчук (1974), Апресян (1974) とそれらで言及されている文献を参照していただきたい。ロシア語の文献では、Апресян (1995) などが семантическая роль という用語を用いている。

以上が本稿で理論的前提として仮定する文法モデルである。

3. 相互代名詞とその先行詞の分布：記述

本節では、相互代名詞とその先行詞がどのような環境にある場合に相互代名詞とその先行詞を含む文および語結合が適格なものになるのか、あるいは、不適格なものになるのかを考察する。相互代名詞とその先行詞が現れる環境をアクタントの形態統語構造と意味統語構造でのランキングを基準に次の六つに区別する。(i) 形態統語構造と意味統語構造での両方のランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある場合、(ii) 形態統語構造と意味統語構造での両方のランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある場合、(iii) 形態統語構造でのランキングで先行詞と相互代名詞が同じランクにあり、意味統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある場合、(iv) 形態統語構造でのランキングで先行詞と相互代名詞が同じランクにあり、意味統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある場合、(v) 形態統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにあり、意味統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある場合、(vi) 形態統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにあり、意味統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある場合。3.1 で (i)、(ii) の場合について、3.2 で (iii)、(iv) の場合について、3.3 で (v)、(vi) の場合について論じていく。

3.1

ここでは、アクタントの形態統語構造と意味統語構造での両方のランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある場合と、その反対に、アクタントの形態統語構造と意味統語構造での両方のランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある場合について問題にする。

下の (12)a では、主要成分 1 で論理主語であるアクタントが主要成分 2 で意味要素 2 である相互代名詞の先行詞になっている。(13)-(15) の各 a では、主要成分 1 で論理主語であるアクタントが二次的成分で意味要素 2 である相互代名詞の先行詞になっている。(12)-(15) の各 b は、それぞれの a の相互代名詞と先行詞の統語的位置を逆にした文である。(12)-(15) の各 a は適格な文であるが、各 b は不適格な文である。

- (12) a. *Таня и Оля* понимают друг друга.
 b. **Таню и Олю* понимает друг друг.
- (13) a. *Все друг другу* доверяют.
 b. **Всем друг друг* доверяет.
- (14) a. *Мы* восхищаемся друг другом.
 b. **Нами* восхищается друг друг.
- (15) a. *Мы* смотрели друг на друга.
 b. **На нас* смотрел друг друг.

次の(16)-(19)の各 a は主要成分 2 で意味要素 2 であるアクタントが二次的成分で意味要素 3 である相互代名詞の先行詞になっている。(16)-(19)の各 b は、それぞれの a から先行詞と相互代名詞の統語的位置を反対にできた文である。(16)-(19)の各 a は適格な文であるが、各 b は不適格な文である。

- (16) a. Я натравил *их* друг на друга.
 b. *Я натравил *на них* друг друга.
- (17) a. Иван прижал *эти диски* друг к другу.
 b. *Иван прижал *к этим дискам* друг друга.
- (18) a. Он *их* отделяет друг от друга.
 b. *Он *от них* отделяет друг друга.
- (19) a. Я противопоставил *эти версии* друг другу.
 b. *Я противопоставил *этим версиям* друг друга.

下の(20)-(22)は名詞を主要部とする語結合である。(20)-(22)の各 a では、格形で現れている先行詞が主要成分で論理主語であり、相互代名詞が二次的成分で意味要素 2 である。(20)-(22)の各 b は、それぞれの a の相互代名詞と先行詞の統語的位置を反対にした語結合である。(20)-(22)の各 a は適格な語結合であるが、各 b は不適格な語結合である。

- (20) a. *помощь студентов друг другу*
 b. **помощь студентам друг друга*
- (21) a. *восхищение Ивана и Тани друг другом*
 b. **восхищение Иваном и Таней друг друга*
- (22) a. *жалобы двух летчиков друг на друга*
 b. **жалобы на двух летчиков друг друга*

次の(23)-(25)も名詞を主要部とする語結合である。(23)-(25)の各aでは、生格で現れている先行詞が主要成分で意味要素2であり、相互代名詞が二次的成分で意味要素3である。(23)-(25)の各bは、それぞれのaの先行詞と相互代名詞の統語的位置を逆にした語結合である。(23)-(25)の各aは適格な語結合であるが、各bは不適格な語結合である。

- (23) a. *наложение карт друг на друга*
 b. **наложение на карты друг друга*
- (24) a. *сочетание слов друг с другом*
 b. **сочетание с словами друг друга*
- (25) a. *противопоставление этих версий друг другу*
 b. **противопоставление этим версиям друг друга*

以上、上に示した(12)-(25)の各aは、アクタントの形態統語構造と意味統語構造での両方のランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにあり、適格な文あるいは適格な語結合である。それに対して、(12)-(25)の各bは、アクタントの形態統語構造と意味統語構造での両方のランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにあり、不適格な文あるいは不適格な語結合である。

3.2

ここでは、先行詞と相互代名詞が形態統語構造でのアクタントのランキングで同じランクにある場合について論じていく。主要成分1、主要成分2、主要成分(生格)は、文および語結合に一つづつしかないので、ここで問題にするのは先行詞と相互代名詞がともに二次的成分である場合についてである。

下の(26)-(28)は与格経験者述語を主要部とする文である。(26)-(28)の各 a は、与格のアクタントが二次的成分である相互代名詞の先行詞になっている。この与格のアクタントは論理主語であり、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある。(26)-(28)の各 b は、それぞれの a から先行詞と相互代名詞の統語的位置を反対にしてできた文である。(26)-(28)の各 a は適格な文であるが、各 b は不適格な文である。

(26) a. *Этим студентам* было стыдно **друг за друга**.

b. **За этих студентов* было стыдно **друг другу**.

(27) a. *Нам* было известно все **друг о друге**.

b. **О нас* было известно все **друг другу**.

(28) a. *Олегу и Наташе* ничего не вспоминалось **друг о друге**.

b. **О Олеге и Наташе* ничего не вспоминалось **друг другу**.

次の(29)-(32)では、被動相動詞(形動詞形)を主要部とする語結合の中に、相互代名詞とその先行詞がある。(29)-(32)の各 a では、造格のアクタントが二次的成分である相互代名詞の先行詞になっている。この造格のアクタントは論理主語であり、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある。(29)-(32)の各 b は、それぞれの a から先行詞と相互代名詞の統語的位置を反対にしてできた語結合である。(29)-(32)の各 a は適格な語結合であるが、各 b は不適格な語結合である。

(29) a. *сообщаемые нами* **друг другу** известия

b. **сообщаемые нам* **друг другом** известия

(30) a. *написанные Олегом и Таней* **друг другу** письма

b. **написанные Олегу и Тане* **друг другом** письма

(31) a. *положенные Таней и Наташей* **друг перед другом** книги

b. **положенные перед Таней и Наташей* **друг другом** книги

(32) a. *снятые этими мальчиками* **друг с друга** рюкзаки

b. **снятые с этих мальчиков* **друг другом** рюкзаки

下の (33)-(36) は、主格のアクタントを論理主語とする文である。(33)a では与格のアクタントが、(34)-(36) の各 a ではいろいろな前置詞を伴ったアクタントが前置詞_oを伴った前置格の相互代名詞の先行詞になっている。(33)-(36) の各 b は、それぞれの a から先行詞と相互代名詞の統語的位置を反対にした文である。

- (33) a. Наташа рассказала *им друг о друге*.
 b. *Наташа рассказала *о них друг другу*.
- (34) a. Таня спросила *у них друг о друге*.
 b. *Таня спросила *о них друг у друга*.
- (35) a. Олег услышал *от этих студентов* все друг о друге.
 b. *Олег услышал *о этих студентах* все друг от друга.
- (36) a. Я беседовал *с ними друг о друге*.
 b. *Я беседовал *о них друг с другом*.

前置詞_oを伴った前置格のアクタントの意味役割は「情報内容」であり、この意味役割は (9) で示した意味役割の階層で最も低い位置にある。したがって、(33)-(36) の各 a では、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにあり、(33)-(36) の各 b では、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある。(33)-(36) の各 a は適格な文であるが、各 b は不適格な文である。

次の (37)、(38) の各 a は、造格のアクタントが前置詞_oを伴った対格の相互代名詞の先行詞になっている。(37)、(38) の各 b は、それぞれの a から先行詞と相互代名詞の統語的位置を逆にした文である。

- (37) a. Виктор ударил *двумя камнями друг о друга*.
 b. *Виктор ударил *о два камня друг другом*.
- (38) a. Я постукивал *двумя палками друг о друга*.
 b. *Я постукивал *о две палки друг другом*.

(37)、(38) で造格のアクタントの意味役割は「道具」であり、前置詞_oを伴った対格のアクタントの意味役割は「被動者」である。(9) で示した意味役割

の階層では、意味役割「道具」が意味役割「被動者」より高い位置にある。したがって、(37)、(38)の各 a では、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにあり、(37)、(38)の各 b では、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある。(37)、(38)の各 a は適格な文であるが、各 b は不適格な文である。

以上、先行詞と相互代名詞の両方が形態統語構造で二次的成分である文および語結合を提示した。上で示した(26)-(38)の各 a は、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにあり、適格な文あるいは適格な語結合である。その反対に、(26)-(38)の各 b は、意味統語構造でのアクタントのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにあり、不適格な文あるいは不適格な語結合である。

3.3

ここでは、アクタントの形態統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにあり、意味統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにある場合と、その反対に、形態統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より低いランクにあり、意味統語構造でのランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクにある場合について考える。

下の(39)、(40)は与格経験者述語を主要部とする文である。(39)、(40)の各 a では、主格のアクタントが与格の相互代名詞の先行詞になっている。主格のアクタントは主要成分1で意味要素2であり、与格のアクタントは二次的成分で論理主語である。(39)、(40)の各 b は、それぞれの a の相互代名詞と先行詞の統語的位置を逆にした文である。(39)、(40)の各 a は適格な文であるが、各 b は不適格な文である。

(39) a. *Молодые* понравились **друг другу**.

b. **Молодым* понравился **друг друг**.

(40) a. *Мы* **друг другу** надоели.

b. **Нам* **друг друг** надоел.

次の(41)、(42)も与格経験者述語を主要部とする文である。(41)、(42)の各 a は、対格のアクタントが与格の相互代名詞の先行詞になっている。対格のアクタントは主要成分2で意味要素2であり、与格のアクタントは二次的

成分で論理主語である。(41)、(42)の各 b は、それぞれの a の相互代名詞と先行詞の統語的位置を逆にした文である。(41)、(42)の各 a は不適格な文であるが⁵、各 b は適格な文である。

- (41) a. **Нас* было жалко друг другу.
 b. *Нам* было жалко друг друга.
- (42) a. **Их* было видно друг другу.
 b. *Им* было видно друг друга.

次の(43)aでも、対格のアクタントが与格の相互代名詞の先行詞になっている。対格のアクタントは主要成分2で意味要素3であり、与格のアクタントは二次的成分で意味要素2である。(43)bは(43)aの相互代名詞と先行詞の統語的位置を逆にした文である。(43)aは適格な文であるが⁵、(43)bは不適格な文である。

- (43) a. Василий не представил *нас* друг другу.
 b. *Василий не представил *нам* друг друга.

下の(44)、(45)は名詞を主要部とする語結合である。(44)、(45)の各 a では、造格のアクタントが生格の相互代名詞の先行詞になっている。造格のアクタントは二次的成分で論理主語であり、生格のアクタントは主要成分で意味要素2である。(44)、(45)の各 b は、それぞれの a の先行詞と相互代名詞の統語的位置を逆にした語結合である。(44)、(45)の各 a は適格な語結合であるが⁵、各 b は不適格な語結合である。

- (44) a. обвинение *двумя известными учеными* друг друга
 b. *обвинение *двух известных ученых* друг другом
- (45) a. поддержка *этими политиками* друг друга
 b. *поддержка *этих политиков* друг другом

次の(46)も名詞を主要部とする語結合である。(46)aでは、生格のアクタントが与格の相互代名詞の先行詞になっている。生格のアクタントは主要成分で意味要素3であり、与格のアクタントは二次的成分で意味要素2である。(46)bは(46)aの相互代名詞と先行詞の統語的位置を逆にした文である。(46)aは適格な語結合であるが⁵、(46)bは不適格な語結合である。

- (46) a. представление профессором *этих сотрудников друг другу*
 b. *представление профессором *этим сотрудникам друг друга*

上に述べたことをまとめると次のようになる。先行詞が主要成分1で意味要素2であり、相互代名詞が二次的成分で意味要素1である場合、先行詞が二次的成分で意味要素1であり、相互代名詞が主要成分2で意味要素2である場合、先行詞が主要成分2で意味要素3であり、相互代名詞が二次的成分で意味要素2である場合、先行詞が二次的成分で意味要素1であり、相互代名詞が主要成分(生格)で意味要素2である場合、先行詞が主要成分(生格)で意味要素3であり、相互代名詞が二次的成分で意味要素2である場合には文および語結合が適格なものとなり、反対の場合には文および語結合が不適格なものとなる。

4. 適格な文および語結合の条件：提案

本節では、相互代名詞とその先行詞を含む文および語結合が、適格であるために、満たしていなければならない条件を理論的に定めてみたい。筆者は次のように考える。アクタントの形態統語構造と意味統語構造でのランキングから導かれるアクタントの総合的なランキングがあり、相互代名詞とその先行詞を含む文および語結合は下に示す条件(47)を満たしている場合に適格なものとなる。

- (47) アクタントの総合的なランキングで先行詞が相互代名詞より高いランクになくなくてはならない。

アクタントの形態統語構造でのランキング(8)と意味統語構造でのランキング(11)をもとに、アクタントの総合的なランキングを導く方法を考えてみる。前節に示した事実により、アクタントの総合的なランキングは次に示す序列を満たしていなければならない。

- (48) 主要成分1・意味要素2 > 二次的成分・意味要素1
 二次的成分・意味要素1 > 主要成分2・意味要素2
 主要成分2・意味要素3 > 二次的成分・意味要素2
 二次的成分・意味要素1 > 主要成分(生格)・意味要素2
 主要成分(生格)・意味要素3 > 二次的成分・意味要素2

アクタントの形態統語構造と意味統語構造でのランキングから総合的なランキングを導く場合、アクタントの形態統語構造でのランキングが統語現象に及ぼす影響力とアクタントの意味統語構造でのランキングが統語現象に及ぼす影響力をどのように評価するかが問題になる。そこで、便宜的に、影響力を、ポイントとして、数字で表現することを試みる。減点法を用い、ポイントが大きいほど影響力が弱いことを意味する。アクタントの形態統語構造での各ランクと意味統語構造での各ランクにそれぞれのポイントを与えて、各アクタントの形態統語構造でのポイントと意味統語構造でのポイントを足し、総合的なポイントを出す。そして、ポイントの低い順に上から語結合に現れているアクタントのランキングを作る。このランキングがアクタントの総合的なランキングとなる。

上の(48)を満たすようなポイントの配分はいくつかあると考えられるが、例えば、形態統語構造の各ランクが下の(49)、意味統語構造の各ランクが下の(50)に示すポイントを持っていると仮定してみる。

(49) 主要成分1(主格):0ポイント、主要成分2(対格):2ポイント、
主要成分(生格):2ポイント、二次的成分:4ポイント

(50) 意味要素1:0ポイント、意味要素2:3ポイント、
意味要素3:4ポイント、意味要素4:5ポイント

上のように仮定すると、主要成分1・意味要素2のアクタントが3ポイント、二次的成分・意味要素1のアクタントが4ポイント、主要成分2・意味要素2のアクタントが5ポイント、主要成分2・意味要素3のアクタントが6ポイント、二次的成分・意味要素2のアクタントが7ポイント、主要成分(生格)・意味要素2のアクタントが5ポイント、主要成分(生格)・意味要素3のアクタントが6ポイントとなり、上の(48)を満たすことになる。このように、(49)と(50)に基づくアクタント総合的なランキングを用いると、相互代名詞とその先行詞を含む適格な文および語結合を(47)で条件付けることができると思われる。

5. 終わりに

本稿では、相互代名詞 друг друг-とその先行詞の分布を考察の対象にした。2節では、相互代名詞とその先行詞の分布を分析する上で理論的前提と

なる文法モデルを提示した。形態統語構造に「形式的区分」に基づくアクタントのランキングを、そして、意味統語構造に「意味的区分」に基づくアクタントのランキングを仮定した。3節では、アクタントの形態統語構造でのランキングと意味統語構造でのランキングを用いて整理しながら、相互代名詞とその先行詞の分布を記述的に明らかにすることを試みた。4節では、アクタントの形態統語構造でのランキングと意味統語構造でのランキングから導いたアクタントの総合的なランキングを用いて、相互代名詞とその先行詞を含む文および語結合が適格になるための条件を定める試みを行った。

本稿で示した言語事実は、ロシア語学、理論言語学、そして、言語類型論などに興味あるものであると思われる。また、本稿で提示した理論は、相互代名詞以外にも応用できるものであり、今後、他の統語現象を考察していく中で本稿で提示した理論を発展させていきたい。

参照文献

- Академия Наука СССР (1980) Русская Грамматика. Москва.
- Апресян, Ю. Д. (1974) Лексическая Семантика. Москва.
- Апресян, Ю. Д. (1995) Образ Человека по Данным Языка: Попытка Системного Описания. Вопросы Языкознания. № 1.
- Арутюнова, Н. Д. (1976) Предложение и Его Смысл. Москва.
- Мельчук, И. А. (1974) Опыт Теории Лингвистических Моделей «СМЫСЛ ↔ Текст»: Семантика, Синтаксис. Москва.
- Падучева, Е. В. (1974) О Семантике Синтаксиса. Москва.
- Bresnan, Joan (ed.) (1982) The Mental Representation of Grammatical Relations. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Bresnan, Joan and Jonni M. Kanerva (1989) "Locative Inversion in Chicheŵa: A Case Study of Factorization in Grammar," Linguistic Inquiry, 20: 1-50.
- Fillmore, Charles (1968) The Case for Case. in Emmon Back and Robert Harms (eds.) Universals in Linguistic Theory. 1-90. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Jackendoff, Ray (1972) Semantic Interpretation in Generative Grammar. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) Semantic Structures. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1994) Head-Driven Phrase Structure Grammar. Chicago: The University of Chicago Press.